

## カント生誕二百年記念會に際して

朝 永 三 十 郎

カントが思想史上に寄與した業績は、哲學以外に互つたものを除外するとしても、極めて多面的であつて手短かに數へ擧げることが困難である。併し概觀的に哲學史上に於ける彼れの位置を示して、之に依て其れ等の業績を一目に見渡すに當つての大體の方位を定めることはそれ程困難ではないと思ふ。かゝる意圖よりして彼れの史的位置を考へて吾々は、彼れの哲學の中心動機は第十七、八世紀の哲學思想が其啓蒙的なること或は自然科学的悟性萬能主義なることの結果として陥つた窮地よりして之を救出すといふことにあつたのであつて、彼れの哲學に於ける種々の革新的思想は此目的實現の種々の様相であつたと言ふことが出来ると思ふ。之に就ては私は他の場處に於て少しく叙説したことがあるが〔雜誌〕思想〔本年四月號〕其處では主として啓蒙思想とカント哲學の問題との關係、啓蒙思想が陥つた難點よりしてカント哲學の問題が如何にして呼起されたかに關して述べて、其問題の解決の仕

方には觸れて居ないから、此處では私は後者の中重要なと思はるゝ一二の點に就て述べて此カント生誕二百年記念會の言はゞ開會の辭に代へやうと思ふ。もとカントの通俗的叙説として目論まれた腹案の一部であつて、研究と言はるべきものではない。カントの一般的紹介の一助ともなるならば幸である。

カント哲學には二つの最重要な創見があつて、其れが自餘の思想の中軸となつて居り、而して後代カント哲學の繼承者と自ら稱し若くは稱せらるゝものゝ中最もよく其眞精神を把握したと考へらるゝものは必ず此二者の何れか、若くは其双方に對して深き理解を有するものであつたと言へると思ふ。其一は先驗的方法であり、他は徹底した倫理的主意説である。

認識批判がカント哲學の最重要な事業の一であつて、嚴密な意味に於ける認識論は彼れを待つて初めて成立つたと考へることは衆説の一致するところであるが、併し認識能力の梭査に基いて其權能と限界とを論究するといふことは彼れに先つてロック、ヒューム等の英國哲學者に依つて既に試みられて居り、其濫觴は更に以前に溯つてデカールにあるといふことが出来る。唯カント以前の所謂認識論はその取

つたところの方法が其課題に相應しないものであつたといふことに着眼して新方法を提唱した點に彼れの最重要な創見があり、而して此新方法の提唱に依て嚴密なる意味に於ける認識論は初めて史上に現はれたのであり、而して其新方法がやがて先驗的方法なのであるから、カント自らが屢その創見の最重要なものとして此方法を擧げ、後世の顯著なるカント繼承者が之を是認するは當然のことである。

認識論はカントに依れば認識の歴史、認識の成立及び過程の心理學的記述乃至説明ではなく、認識の豫想、約の考査である。但しカントは認識の概念を極めて狹義に限定した。第一に、認識論の研究に當て常にカントの眼中にあつた認識は自然科學的認識、或は更に狹く、ニュートンに依て最典型的に代表せられた數學的機械的物理解學であつた。これは物理學以外には科學が認められなかつたといふ彼の時代よりして、又た啓蒙思想の爲めに陥つた窮地よりして哲學を救ひ出すといふ彼の哲學の一中心動機に對して當面に必要なことは自然科學的認識の權能と限界とを審查するといふことであつたといふことよりして、説明され得るのである。併しカントによれば此自然科學に於ても一切の命題が眞正の認識を含んで居るのではない。たとへば假説や、憶説や、若くは既知の概念をば其内に考へらるゝ内容に從て結付け

た命題や、の如きものは眞の認識ではない。眞の認識はカントに依れば二つの特徴を具備せねばならぬ。即ち其れは一般的必然的に妥當すると共に吾々の知識を擴張するものでなければならぬ。但し經驗は從來ありしこと、現在あることを示すのみで、一般的必然的であらねばならぬことを示し得ないから、知識を擴張することは出来るが、一般的妥當性と必然性を要求する認識を基礎づけることは出来ぬ。従て眞の認識は擴張的であると共に先天的でなければならぬ。これが即ちカントが先天的綜合判斷と呼んだものであつて、斯の如き判斷は如何にして可能であるか、或は如何なる豫想又は制約に拘束せられて居るかを考査するといふことが、彼れの認識論の中心課題であつた。斯の如き意味に於ける認識が或圏域に於て、或は或對象に關して、果して可能であるか否かは、斯の如き制約が其圏域或は對象に於て、充足せらるゝや否やに依て定まる。従つて此制約が決定すると同時に斯る認識が到達せらるべき圏域又は限界も決定し、カントの當面の問題たる自然科学的悟性の權能も之に依て定まるべきである。これが即ち彼れの先驗的方法であつた。

但し認識及び認識論の概念を斯の如く狭く限定することの可否は尙ほ疑問となり得るであらう。更にカントが此方法を活用した詳細の點に立入り、又た此方法を

以て到達した結果に就て見たならば、今日承認しがたき多くのものを含んで居るであらう。殊に今日の如き廣さに於て擴大され部分的に細密となつた科學の研究に對しては、カントが毫も考慮しなかつたやうな認識論的の疑問や問題やが成立すべきではないかといふことは、今日の吾々が眞面目に考査せねばならぬ問題である。併し認識論の問題は彼れに依て充分正當に示されたと言ふことが出来る。此先驗的方法の適用に對しては與へられたる事實としての科學が基礎となる。先驗的方法は其科學が可能なるか否かは問はない、唯如何にして可能なるかを問ふ。科學を創作しやうとはしない、唯既存の科學の可能制約を探究せんとする。併し此探究に依て吾々の理性を訓練して不注意なる理性使用、即ち其根本概念や根本命題やの濫用を慎ましめ、又た科學研究の「法規」を設定し、研究者をして之に頼つて如何ほど認識の理想を實現したかを知らしむべき指針を供給することが出来る。斯くて認識に關する理説はやがて既得の知識の批評、即ちその價值校査の標準を示すこととなる。

尤も此先驗的方法と倫理的主意説とはカント哲學に於ては孤立したものでなく、緊密に結付いて居る。先驗的方法に依て自然科學の基礎が校査せられ自然科學的

悟性の權能と限界とが論定せられて(此方法が適用せられたのは單に認識論に於てのみでなく、道德及び趣味の研究にも適用せられて居るが、併しそれが最嚴密に適用せられたのは後者に於てゝある)初めて倫理的主意説の成立し得べき準備が整へられ、その爲めの餘地が開拓せられるのであり、而して認識論の論究に際しても倫理的主意説は絶えずカントの目標として役立つて居るのである。のみならず、後代のカント研究者中の有力な一部が爲したやうに、かの第一批判書の再版序文に於ける「私は信仰に餘地を與へんが爲めに知識を取除かねばならなかつた」なる文句に専ら重きを置きて、カント哲學の核心を其實踐哲學或は新形而上學の建設に置き、その認識論は専ら啓蒙期の自然科學的悟性の潛越を打破する爲めのものであつてカント哲學に於ける其れの意義は主として消極的であり、其積極的の面と見らるべきは實踐哲學である、と考へるとには充分の理があると思ふ。カントの著書中彼れの反形而上學的發展期を最鮮かに示し當時の形而上學を嘲笑することを主要題目とした「視靈者の夢」に於て彼れは尙ほ、彼れが已み難き形而上學的要求を有すること、「運命」に依つて「形而上學に愛着」といふとを告白して居る。第一批判書の再版の序文に於ては辨證論に於ける形而上學即ち超經驗對象の形而上學と並んで分析論に於け

る其れ即ち自然の形而上學を同等に重要な問題として居るが、初版の序文に於ては後者には、僅かに接觸はして居るが大部分前者を問題として居る。是等及び其他の理由に依つて批判哲學の當初の中心動機が自然科學の基礎づけといふよりも寧ろ新形而上學の建設にあつたとするは不當ではないと思ふが、併しさればと言つて、ヒュームの懷疑論に對して自然科學の基礎を救護確立するといふことが彼れの實踐的關心を離れて獨立の關心を引いて居なかつたといふことは、先批判期の彼れが自然科學的研究自體に深き關心を有し、一時はニュートンの數理的物理學の發展者、完成者たることを以て自ら任じて居たといふこと、又た「自然科學の形而上學的基礎」や、彼れの最晩年の作にして遺稿として殘された、支離滅裂にして唯彼れの老衰の面影を偲ぶ料となるにすぎぬと一般には考へられては居るが、併し彼自身は常に之を「主著」と稱して居たといふ、形而上學（即ち「自然科學の形而上學的基礎」）より物理學への推移に關する著述があるといふこと等から推しても、是認し難きことである。而して更にカント哲學が後代に及ぼした影響といふ點より見れば、一層先驗的方法に依つての科學の基礎づけといふ彼れの事業に獨立の重きを置かねばならぬ。

斯くてカントが自然科學の基礎づけの問題自體に深き關心を有して居たといふ

ことに就ては疑ふ餘地はないが併し彼れは認識論の研究の間にも絶えず實踐哲學に於ける新形而上學の建設といふことを念頭に置き、辨證論に於ては舊形而上學の批評に多くのペーヂを割愛して之を完膚なきまでに破壊し了つて、新形而上學の建設に進んだのであるが、此新形而上學への出發點となつたものは實に彼れの徹底した倫理的主意説であつた。

併しカント哲學を斯かる名稱を以て特徴づけることには、主意説なる語の多義的なることに基いて種々の誤解を伴ふ恐れがある。今私はカントの主意説をば、屢、主意説の典型的代表者として擧げらるゝシヨールペンハウエル、及び半ばシヨールペンハウエルを繼承し半ば之に反對して出でたニールツエの其れと對比することに依て其意味を明確にしたい。斯くすることに依て吾々はカントの主意説の特殊性、其れが主意説として最徹底したものであるといふこと、及び其れが啓蒙思想に對する如何に大なるコントラストを示して居るかといふことを最よく明かにすることが出来ると思ふ。

先づ主意説と言へば(心理的主意説を除外して哲學的主意説と解するとして)多くの人は恐く第一にシヨールペンハウエルの意志の形而上學を想起するであらうと思



ふが、カントの世界觀の中心をなすものはショーペンハウエルの場合の様に意志一般でなくして、道徳的善意志、道徳法に服従するところの意志である。而して更に此道徳的善意志は意志の形而上學に於てのやうに宇宙の實體又は宇宙根柢では無い。意志を宇宙根柢と考へる意志の形而上學は、知性の上に立てられた一の理説又は理論であり、知性に依ての物自體の認識であり、而して此認識に認識としての最高位置を與ふると共に、更に此認識に依て實踐問題に關する吾々の態度も決定されねばならぬとするものであるから、寧ろ著しく主知的であると言はねばならぬ。斯くて此意志の形而上學に於ては主意説は尙ほ極めて不徹底であると言はねばならぬ。カントは之に反して其認識論に基いて理論としての形而上學一般を不可能であるとして、進んで知性を越えての意志の優越を説いて主意説を徹底せしめた。尤もカントと雖も道徳的意志に關する一種の知識はその成立を認めた、其倫理學は即ち其れであるが、併し其れは道徳的意志に關する形而上學ではなく、單に道徳的意志の意味を理解し、而して其れの承認をば存在に關する自然科學的認識の承認と如何にかして協調する、といふことに限られたものであつた。

カントに依れば、意志が形而上學的役目を演じ得るは知性に依て理解せられ得る

ところの世界の本質又は實體として、はなくして唯、超理解的世界に於て善を實現せんが爲めに行動するところの道德的意志としてある。ショーペンハウエルに於ては意志をして形而上的たらしむるものは意志の作用でなくして實有である。意志は一切の意志の働きに先つて初めより形而上的であるから、形而上的者を意とするは出來ぬ。而かも哲學的知識に依て初めて、換言すれば彼れの形而上學を認識する者に對して初めて、形而上的意味を有することが出来る。之に反してカントに於ては意志することに依て、或は更に精密に言つて意志する仕方に依て初めて形而上的意味を有し來る。形而上的世界は吾々が認識に依て到達し得るところ實有の世界でなく、道德的意志が自らの力に依て自らを其處に高め行くべき世界である。意志は世界説明の原理ではない、其自身に於て万有の實體であつて其れが吾々の認識に依て初めて認めらるゝといふのでなく、自己の自由に依て善を追求することに依て己れを形而上界に高め行くものである。意志をして形而上的意味を有せしむるものは、其自身が、而して唯其自身のみが、自らに與へ得るところの一の性質即ち道德的であるといふとである。従つて又た、形而上的者は單に從來の形而上學者が考へたやうに哲學的に思索する者の特權に屬するものでないのみでなく、全然思

索の領域以外に屬するものであつて、唯感性的傾向性を克服して道德的當爲に従つて意志行動するものに、而して斯るものでありさへすれば如何なるものにも、現はれ來るべきものである。無論倫理學は意志をして形而上的の意味を有せむる所以の此性質を理解するものが出來、又た理解せねばならぬ。それがやがて倫理學の職分であるが、併し意志が此性質に依て形而上的に高められるといふこと、其れの價值自體は毫も此倫理學的理解には依存しない、唯斯く理解せらるゝところのものに依存する。行に關する理説には依存しない、行其者に依存する。形而上的者は一切の理論的認識に對して一般的にして同一的なるものでなくして、意志が意志するところの一般的にして同一的なもの、而してそれを倫理學が道德的意志の形式として理解するところのものである。超感覺的實有の法則でなくして超感覺的意志の法則である。形而上的自然法なるものはない、唯吾々の内に於ける道德法のみが形而上的の法則、超感覺的世界の法則である。此法則に服従するものは、而して之に服従するものゝみ、感覺界を超脱し自然必然性の桎梏を破つて現象の彼岸に於ける自由の王國に生れ出ることが出来る。存在の認識は決して吾々を感性の圏域以外に導き行くことは出來ぬ。時間空間に依て區切られたる有限の世界に限られて居る。吾々をして此

限界を越えて時空を超越したる永遠的者に到達せしむるもの、人を自然法の拘束より解放して自由の天地に導くものは、唯當爲に向けられたる善意志である。

斯くて、實有の形而上學の上に道德を基づけるところの思想家に取つては、その形而上學を承認するものゝみが眞に有德的であることが出来るに反して、カントに依れば徳は有知無知に關係なく凡ての人が同様に所有し得るところの性質である。

此點に於てカント哲學は主知主義的なる啓蒙思想に對する強きコントラストを示すのみならず、古來の哲學的倫理説の多くが貴族主義的なるに對して全然平民主義的である。而して吾々はカントがルソーよりして受け得た影響の最大なるものを此處に見出すのである。彼れ自らの記すところに依れば遺稿斷片、彼れも亦最初は古來の哲學者、殊に啓蒙期の思想家と同様學問を遍重し、自ら學者を以て誇り無知の俗衆を輕蔑して居たが、此誤つた卓越感はルソーに依て打破せられた、ルソーよりして彼は初めて「人間を尊敬することを學んだ」。人間に於て第一に高貴なるものは其知的教養でなくして其内に存する人間性、或は道德的價值である、此道德的價值を有するが爲めに人は單に人として平等に尊敬されねばならぬ、これが彼れがルソーよりして受け得た教訓であつたが、併し彼れは更に此思想を哲學的に精鍊して自己の

實踐哲學の核心としたのであつた。

斯くてシヨールペンハウエルの意志の形而上學は、第一にそれが知の上に立つといふ點に於て主知的であると言はねばならないが、單にそれのみに止まらず、更に其意志の形而上學其者の内容に就て見ても主意主義は不徹底に了つて居つて、其點に於ても亦カントの倫理的主意説と著しきコントラストを示して居る。カントに於て眞誠なる形而上學的業は意志であつたが、シヨールペンハウエルに於ては其れは知らるゝ如く意志の否定であつた。前者に依れば人は道德的に意志することに依て、行の力に依て、理性の王國の樹立に合力するときに、自然必然性より解放せられて形而上的尊嚴を獲得するのであるが、後者に依れば、意志の無意味なることを知つて全然之を放棄するときに、一切の行より解放せらるゝ時に、現象界の拘束より解脱して形而上的狀態に自らを高めることが出来る。斯くてシヨールペンハウエルは最後に至て、物自體或は宇宙の本體をば意志とする立場を徹底して維持することが出来ず、物自體は意志たることも得、又た、たらざることをも得るところの不可理解的の或者、涅槃である、之を意志と名づくるは唯その顯現の最顯著なる性質を取つた結果、即ち

「秀性命名」に過ぎぬ、と自白せざるを得なかつたのである。

斯るシヨールペンハウエルの主意説に比すれば、ニッチェの主意説は遙か徹底したものである。なせなれば、第一に彼れは最初よりして意志の形而上學を説かない、意志をば世界の本質又は自體者であるなど考へない。而して又たシヨールペンハウエルに反して飽くまでも意志を肯定する。意志否定を説法し涅槃を憧憬したシヨールペンハウエルに反對して、徹底的に意志其者の爲めの意志に最高價値を認め、其結果として權力への意志を説法する。彼れによれば、權力への意志は意志肯定の最高表現である。なせかなれば、絶對的に意志する者は意志せらるゝことが何等の障礙もなくして實現せらるゝといふ力を意志せねばならぬ。權力への意志は無制限なる意欲への意志であつて、分量上最高度の意志である。併しこゝに一の疑問が起るであらう。權力への意志は人間の自然的傾向性ではないか。若し然りとすれば之を勸奨し説法する必要は何處にあるか。蓋しニッチェが此必要を認めた理由は人間の自然的傾向性は從來の誤れる形而上學——此感性界は眞在の世界ではない、眞在の世界、吾々の理想が充たさるべき世界は彼岸にあるとする形而上學に依て阻礙せられて居る、吾々は斯の如き謬想を芟除して純眞なる人性の發動に自由の天

地を開拓し與へねばならぬ、といふにある。此感覺界が唯一の眞なる世界である、超感覺的世界、形而上的世界はない、従つて汝の獲得し得る一切のものは、此感覺界に於てのみ求めらるべきである、超感覺界を説く形而上學の謬想に迷はざるゝことなく、此感覺世界よりして汝が獲得せんと欲する一切のものをかき集めよ、必要の場合には之を強取せよ、と彼れは説くのである。斯の如くして彼れの權力への意志の説法の根柢には、シヨールペンハウエルの彼岸の形而上學に反對した此土の形而上學、シヨールペンハウエルの虚無を神化するところの形而上學に反對した、現實界及び現實的なる一切を神化するところの形而上學が存する。即ち彼れも亦一種の形而上學、謂はゞ排形而上學的形而上學とも稱せらるべき一種の形而上學を説く者であつて、彼れの徹底的意志肯定説は此形而上學と共に立ち共に倒れるものであると言はねばならぬ。眞の主意主義者に取つては如何なる意志と雖も無意志——シヨールペンハウエルが説法するところの意志の否定に優れるものでなければならぬ以上、如何なる行と雖も行なき——シヨールペンハウエルが憧憬するところの無爲の涅槃よりも價値あるものでなければならぬ以上、ニッチエの主意説はシヨールペンハウエルの主意説に比すれば遙かに徹底したものであると言はねばならぬが、併しそれは此形

而上學説と起仆を共にせねばならぬものであるとすれば、彼れは其れだけ主知主義に讓歩したと言はねばならぬ。唯此形而上學が意志の要求であると考へられる時に初めて彼れの主意説は徹底するのであるが、併し果してさう考へられ得るであらうか。寧ろ生滅轉變の此の感覺界に對して恒常不變の意味と價值との世界がある、感覺界に於ける成功結果を離れた超感覺的なる當體的なる善があるといふ事が、意志の根本要求ではないか。無論これは理論の問題でなくして意志の問題である以上、論證に依て之を肯否するは不可能であるべきであるが、併し斯る要求を有つ以上人はニールツエ説に贊同することは出来ないであらう。而してカントは之を肯定して出發するのである。カントによれば此事は意志の根本要求として何人と雖も承認するであらう、唯哲學的知性が此承認を廻避し若くは非認し得ると誤信するのみである。カントの實踐哲學の精神を最よく最早く理解諦味した一人であるシルレルが「カント哲學の實踐的部分を支配するところの觀念に關して異見を有するは唯哲學者のみ、人間は古來常に一致して居る」と言つたのはカントの眞意を最よく言表はしたものである。斯くてカントが最後の訴庭として訴へたものは意志の直接要求、其れが直接に吾々に迫り來るところのことであつて、意志に關する何等かの形



而上學說ではない。無論最後の訴庭が意志の要求であつてその理論的證明は不可能である以上、此要求を要求として非認するものを理論的に説服する術は無い、斯る者はカントの倫理説に取つては無縁の衆生であるとする外は無い。併し此非認を理論的に基礎づけんとする哲學説はまた理論の武器に依て之を説破することが出来る、カントの認識論は實に之を爲し得たのである。

但しカントの認識論と主意的倫理説との關係を解して、超感覺界の知識は限られたる人間認識の權能を踰越するが故に已むを得ず之に棄權して意志の直接要求の上に形而上學を建設する外はない、といふにあると見るは全然カント哲學の精神に背反することである。カントの眞意は道德的意志に於て現示せらるゝ超感覺界の存在の直接的確實性がやがて此確實性を越えて斯る知識を求むるを禁止する、換言すれば吾々は超感覺界の知識を有ち得ないといふのみでなく、如斯知識を求めてはならぬといふのである。若し吾々の知らぬといふことが單に知り得ぬといふことに基くとすれば、カントの主意説は主知主義的諦らめの結果に過ぎぬであらう。知に依て形而上學を求めて得られざる結果の窮策的代用物に過ぎぬと言はねばならぬであらう。併しカント哲學の精神に従へば、吾々の形而上學的不知は不能知に

基くのではなくして不當知又は不許知に基くのである。而して斯く考へることに依てカントの主意説、理論的理性を越えての實踐的理性の優越の思想は初めて完全に徹底すると言ふことが出来る。カントに依れば當爲は最終者、絶對者である。之を制約する何者もない。若し其れが示すところの確實性をば何等かの他の根據よりして説明し若しくは導出せんとするならば、其れの嚴肅と尊嚴と不可侵性とは失はれる。のみならず、世界を一の完了したものととして在りの儘に之を認識すると考ふるどころの形而上學は、當爲をして無意味ならしめねばならぬ。絶對的眞理を有すると思ふるものに對しては、それはたとへばスピノーザやライブニッツの如く世界は其儘神的存在である、神に依て與へられたる法則に従ふと考ふるとしても、若くはシヨーンペンハウエルの如く全然盲目的にして道德的乃至宗教的價値に對して全然無頓着であると思ふるとしても、道德的戰鬥は全然無意味である。意志の否定を至高状態と考へたシヨーンペンハウエルの寂靜主義も、一切の是非の分別を離れた永遠的實體の觀想を至高状態と考へたスピノーザの靜觀主義も、其形而上學、或は一般的に實有の知識としての形而上學の正當の結果と言はねばならぬ。斯くてカントは形而上學的意味に於ての世界の不可認識性をば道德的當爲の無制約的妥當の必然的

結果として導出した。實有の知識としての形而上學の不可能は單に理論的に必然的なる(これは認識論に於て證明せらるゝのであるが)のみならず、又た道德的に必然的である。斯る形而上學は知性の迷想であるのみならず、又た道德的當爲の尊嚴を毀損するものである。

以上カント哲學中に於ける最重要なる創見と思はるゝものゝ二つに就て叙説したが、併し此創見には尙ほ多くの啓蒙思想の殘滓を混じて居た。此殘滓を淘汰してカント哲學の精神を純なる形を以て現はすといふことが後代繼承者の重なる事業として殘された。

カント直後のカント祖述者の事業は一見多岐に互つて居るが、併し其有力者の關心點は先驗的方法に依ての科學の基礎づけではなくして實踐哲學であつた。蓋し啓蒙期の長き間自然科學的悟性が跳梁を極めた結果、宗教と道德とは存立の基礎を失ひ、フイヒテの謂ゆる「道德の根柢は破壊せられ、義務の概念は凡ての辭典より抹殺せられりたる此時代」に於てカントの實踐哲學は實に學的基础の上に眞摯なる道德的及び宗教的意識に満足を與ふる唯一の福音であつたのであつた。シルレル

が第二批判書の心讀者であつたことは周知の事實である。カント宣傳期のラインホルドのカント宣傳の動機は實に啓蒙期の理神論、汎神論、懷疑論、等をあさり盡して而かも彼れの心胸の求むるところのものを得る能はず、最後にカント哲學に接して其れが道德及び宗教上の信念に不動の基礎を供給し吾々の精神を高め且つ淨める偉大なる力を有するものであるといふことを見出したといふことであつた。而して彼等の後を承けてカントの倫理的主意説よりして不純の附着物を淘汰して充分に之を純化し、之を以て自己の哲學の出發點としたものはフイヒテであつた。

カント哲學が先驗的方法に重きを置いて復活されたのは前世紀七十年代以後である。前世紀後半に於けるカント復興はカント直後に於けるカントの祖述又は宣傳に反して自然科学と固く結附いて居る。最初其れが復興された動機は主として、一方ロマンチック期の思辨的觀念論諸體系が自然科学を輕視した反動として、他方主として前世紀初期以後に於て異常の進歩をなした生物學的自然科學(第十七、八世紀に於ける自然科学は主として物理、天文であつた)に對して前世紀半前後よりして最深き關心を惹いたものは生物現象の研究であつた)の勢援を得て勃興した唯物論に對して、之に正當の意義を與ふると共に其潛越を論駁する武器として、あつたが、

其れが發端となつて種々のカントの祖述者又は研究者が出でた中に、自然科學其者の基礎づけがカント哲學の最重要な事業、或は少くとも其一であつたことに着眼せられて、其方法の本性を明かにし、之を純化し、或は更に進んで其適用の範圍を擴大することを以て重みな仕事とする、所謂マールブルグ派、バーデン派等が出るに至つた。今日の史家が此二派を以て初めて嚴密な意味の新カント派と稱するに足るとする所以は實に主として、此カントの方法に對する深き理解と其れの純化とがあるが故である。而して更に發展するに連れて先驗的方法と倫理的の主意説の主要觀念との緊密なる結合が成立つて來た。而して斯くカント哲學の眞髓が把握されたことが機縁となつて前世紀の終りに進み現世紀に入るに從つてカントの理解は益深められると共に普及されて來た。固より多少の除外例は認めねばならぬが、現代獨逸哲學の主流は大體カント「ルネッサンス」の中に動いて居ると言へる。此カント「ルネッサンス」の隆盛を最よく表示するものは「カント協會」が一八九七年に創設せられ、其處で獨佛米、以の代表的哲學者の協同の下に「カント研究」が發刊せられ、以て今日に及んで居ることである。

カントの最初の傳記者の一人として有名なポロースキーは言つた。「彼れ(カント)

の哲學、少くとも其名は逐ひのけられることが出来るであらう。併し彼れが規律を嚴守したこと、及び教職に忠實なりしことに依て無數の人に與へた善き印象は決して抹殺せられぬであらう。此印象は既にカントの模範に倣ふやう種々の官職及び位置に於ける幾多の人々を鼓舞したが、更にまた是等の人々を通じて感化を後世に及ぼすであらう」と。これは實にカント易箆の年に彼れの厚き崇敬者として知られた遺弟の筆に成つた言葉である。即ち彼れはカントに於て強き感化を後世に與へると確實に信せられ得るものは彼れの實踐躬行であるとして、彼れの哲學、其者が不朽の價值を有するといふこと、少くとも其名を標榜して祖述者や唱道者が出でるといふことに對しては強き確信を有することが出来なかつたのである。而してこれは恐く當時に於ては彼れ一人の意見たるに止まらず、又た多數のカントの友の意見でなかつたであらうか。何となれば、此時シュルツ、ラインホルド、シラツ、フリーフェランド等のカント哲學宣傳の時期は既に去つて、フィヒテは「キッセンシャフツレー」の旗幟を樹立し、而かもその最ロマンティックの傾向に富んだ伯林期の思想を發表し始め、シェリングは其絢爛なる美的觀念論、シュライエルマッヘルは其宗教哲學の思想を既に公けにし、ヘーゲルまたイエナの講壇に自家の見を立て始めつゝあつた

時であり、而して一般學海は只管「ロマンティック」の時代思潮に投じた是等の哲學思想の送迎に忙はしく、是等の思想の共通の母胎たるカント哲學を忘却せんとしつゝあり、而してカント自身は是等の思想上の子孫が背丈けの延びるに従つて次第に生みの親の意志を尊重せずして各自その好める道を取り行くを見て憂慮し、老の一徹の結果時には苦々しき感情をさへ洩らして居た時期であつた。多くのカント崇敬者も亦彼れの人格的感化の方をば確信しつゝも彼れの學說其者、少くとも其名が永久に他の哲學の爲めに追ひのけられ了ることの可能を否定する確信を有せなかつたのは自然の勢であつたかも知れぬ。

併しカントは彼れの友よりも遙かによく彼自身の眞價を知つて居た。而して同時にまた眞に價値あるものは決して永く忘却の裡に葬り去らるゝものでないといふ強き確信を有つて居た。而して其確信は適中した。彼れが一七九九年に「百年の後」に人は初めて私の著述を充分に理解するであらう、而して然る後に私の書を新たに研究し且つ承認するであらう」と言つた豫言はまさしく事實となつて現はれた。前世紀半ばに學海の一隅に起つた「カントに歸れ」の呼聲は世紀末に近くに從つて徐々に併し確實にその強さを増しつゝ擴がり行き、カント哲學は其名を標榜して、堂々

と復活して來たのである。而かもかの「カント協會」の創設と「カント研究」の創刊とは、此カントの豫言後あたかも百年目の一八九七年であつた。

此一篇は雜誌「思想」本年四月號に掲載せられし「啓蒙思想とカント哲學の中心問題」の續篇の一部と見らるべきものである。尙ほ本篇、カントの倫理的主義説に關する論述に就ては *Kroner Kant's Weltanschauung* 參照。